

# 復興を歩む

vol.29

## 飯樋の盆踊り

8月14日の午後、時折小雨が降る中、飯樋町集会所前の広場では、やぐらの準備が進められていました。震災で途絶えていた盆踊りの、7年ぶりの復活です。

この復活に立ち上がったのは、「復興有志の会」でした。会による実行委員会の荒利喜委員長（飯樋町）は、「汗をかき、金を出し、文句を言われ、頑張っているんだよ」と笑います。「笑っているけど、ホントのことだからね」。慎重論もあった中、実行委員会は、開催実現に奔走しました。

やぐらが仕上がると、カラオケを楽しみながら、盆踊りの時間を待ちます。震災前を思い起こさせる、懐かしい光景です。かつて飯樋町で行われていた盆踊りは、お年寄りから幼な子までが心待ちにする一大イベントでした。祭り提灯が灯る下に、たくさんの屋台が並び、大勢の人たちが、帰省した家族を連れて、

会場にやってきました。踊り手の表彰もあることから、盆踊りにも力が入り、仮装部門の入賞を目指す参加者の過激な仮装は、語り草となる名物でした。

やぐらの上で、花塚太鼓が鳴り響き、いよいよ盆踊りの始まりです。「私たちの盆踊りは、いつも生演奏なのよ」と、子連れの女性が教えてくれました。小さな子どもから、車イスを押されて来場したお年寄りまで、約80人が、やぐらを囲んでいました。荒さんは、万感の思いを込めてマイクを握ります。「数十年、地区が引き継いできたもの。我々の代で失くす訳にはいかない。先人の思いを次の世代につなぎたい」。

はじめ20人ほどが作った踊りの輪は、次第に大きくなり、やがて二重になって、熱気を帯びていきました。初老の男性が、涙を浮かべています。「酔っ払ったかな、涙が出るぞ」。浴衣姿の人もあります。「毎年こうして踊っていたの」。埼玉から父親の実家に里帰りしたという小学生は、初めての盆踊りを、見よう見まねで一生懸命踊っていました。

以前のような体制が取れない中での開催は、苦心の連続でした。準備や片付けには福島大学の学生らが協力。村を支援する「いいたてまでの会」からは賞品の提供がありました。「いろいろな人から力を貸していただきありがたい」と荒さん。盆踊りの輪が解けお開きの時間になると「先祖の供養だから、しっかりやれるようになっていきたいね」「来年はもっとにぎやかになるかな」と早くも来年を心待ちにする声があちらこちらから聞こえてきました。

